

地上と宇宙を粘土でつなぐ きぼう利用宇宙モデリング

彫刻家の米林雄一氏（東京藝術大学名誉教授）が代表研究者を務めた

「宇宙モデリング」の試みが、2008年8月に国際宇宙ステーション（ISS）の「きぼう」船内実験室で行われた。「文化／人文社会科学利用バイロットミッション」の一環として、ISS第17／18期長期滞在クルーのグレゴリー・シャミット宇宙飛行士が担当したのは「未来のヒトを想像しながら、粘土（手芸や工作で使われる軽量粘土）でひとがた」を2体製作する」というミッションだった。（文／喜多充成）



"ひとがた"を製作中のシャミット宇宙飛行士(左、NASA提供)と地球帰還後、米林氏に届けられた作品

つまりは「宇宙で粘土細工する」ということだが、しかしシンプルなその行為の背後には人間と芸術に関わる深い意味が込められている。そもそも彫刻は人類最古の表現形式だ。初期の作品はおそらく、つくり手であるヒトを模倣した「ひとがた」であつたろう。そして彫刻という行為は、製作を通じて作品と自分の内面との関係をつくっていくことでもある。自分と作品の間の密な交流があつてこそ、作品は光を放つ——。

そうした背景を踏まえ「宇宙モデリング」を提案したのが当時東京藝大教授だった米林氏だ。長い準備期間を経て実施にこぎつけたのは昨年8月12日未明のこと。ISSからのリアルタイム映像を筑波宇宙センターで見守った米林氏はこう振り返る。

「粘土をこね始めたら、饒舌だつ

地上での創作活動を 宇宙とつなげる

あとの半分を担当するのは、地

上の子どもたちである。宇宙飛行士の活動をビデオで見た後、同じ

「ひとがた」を取り組むワークショップが、東京藝大のお膝

上順書には、撮影や製作の手順が

元の台東区や愛媛県の松山市などで実施され、好評を博した。

いたのだという。



米林氏が手にしている金属のケースは、ISSに軽量粘土を運び作品を持ち帰ったフライト品（実物）

米林雄一

Yonebayashi Yuichi

東京藝術大学名誉教授。1942年東京都生まれ。金沢美術工芸大、東京藝大で彫刻を学び、東京藝大で教鞭を執る（2008年春まで）。「きぼう」利用関連では「宇宙手形」「宇宙モデリング」などを提案し、実施した。

「宇宙へ送った粘土、余ったんじやないかと思っていますが、われわれのもとには戻ってきてない。たぶんシャミットさんが何かをつくり、自分のお子さんにでも持ち帰ったのではないでしょうが」

宇宙飛行士もまた創作を通じ、地上と意識を通していたに違いない。